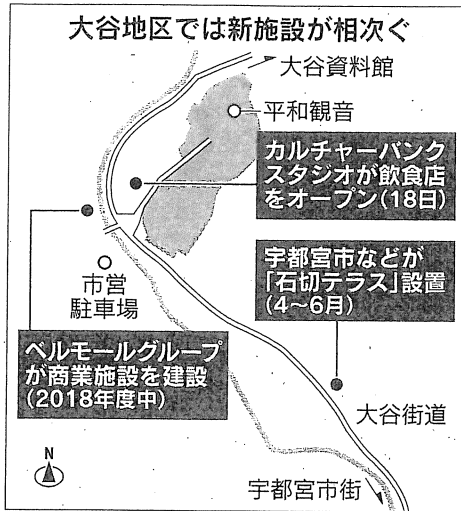


大谷観光ゆづりコミュニティ

建築用石材「大谷石(おおやいし)」の産地として知られる大谷地区(宇都宮市)の活性化に向けた官民の動きが活発になっている。飲食店などの商業施設が相次ぎオープンするほか、宇都宮市などは道路沿いのあまり利用されていない土地に観光客の休憩場所を造成する。低未利用地が目立ち、長時間滞在できる場所が少ないという大谷の弱点が改善され、にぎわいが増しそつだ。

商業施設開発コンサルティンクのカルチャーバンクスタジオ(同)は18日、大谷の目玉の一つである「平和観音」へ向かう参道の入り口で飲食店を開く。約20年間空き店舗となっていた「大谷レストハウス」跡を改装し、ベーカリーとカジュアルレストランを組み合わせた店舗とする。



飲食店など続々開業

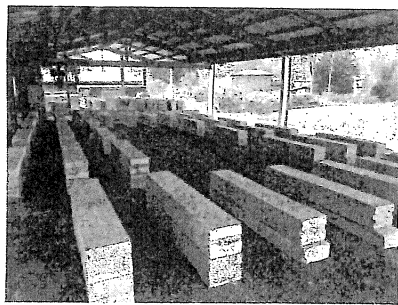
大谷石使った休憩所も

建物は延べ床面積約350平方メートルの2階建て。レストランは主に宇都宮の食材を使用し、2階では市内のミュージシャンを招いた音楽イベントなどを随時開催する。市営駐車場の向かいという立地を生かして観光客を呼び込み、宇都宮の魅力を発信する。

さらに市営駐車場の隣には、大谷石を採掘する大谷石産業(同)を含むベルモールグループが、飲食店や物販店などからなる商業施設を建設する。投資額は2億〜3億円となる見込み。201



カルチャーバンクスタジオが開業する飲食店。奥にはベルモールグループが商業施設の建設を予定している(写真上)。宇都宮市のDC推進委員会が設けた「石切テラス」(同下)



8年度中の開業を見込んでおり、延べ床面積700平方メートル規模(うち飲食が400平方メートル程度)の施設とする方針だ。市は4月から大谷振興

のために規制を緩和しており、飲食店などの最大延べ床面積の目安を200平方メートルから500平方メートルに広げている。JRグループが4〜6

月に実施する大型観光企画「ダスティネーションキャンペーン(DC)」を機に、行政の取り組みも進む。市などからなるDC推進委員会は、石置

き場となっている大谷石の旧加工場に「石切テラス」を造成した。大谷石を並べ替えていすに見立て、観光客が座って休憩できるようにした。市はこのほど「大谷石文化」の日本遺産への登録を申請するなど、大谷地区の観光振興を強化しているが、同地区には低未利用地も多い。市は石切テラスを低未利用地の活用モデルと位置づけ、同様の取り組みを周辺事業者などに促したい考えだ。